

緑の動脈づくり（仮称）

【特にご検討いただきたいポイント】

1. 「緑の動脈づくり（仮称）」に関連して、「共生」と「循環」の関係をどのように考えればいいか。
2. 構想の名称は妥当か。
案として、自然のバイオ・ネットワーク、水と緑のネットワーク等が考えられる。
3. 「緑の動脈づくり（仮称）」のためのポイントは何か。

●ポイント 1 の説明

～「共生」と「循環」の関係の整理について～

1. これまで国土審議会基本政策部会持続可能な国土の創造小委員会において、21世紀の国土のグランドデザインで提案した「生態系ネットワーク（エコロジカル・ネットワーク）構想」の発展系として「緑の動脈づくり（仮称）」（「水と緑のネットワーク」構想の名称変更）を提案し、今後の計画において、これを主要施策の一つとして位置づけていきたいと考えている。

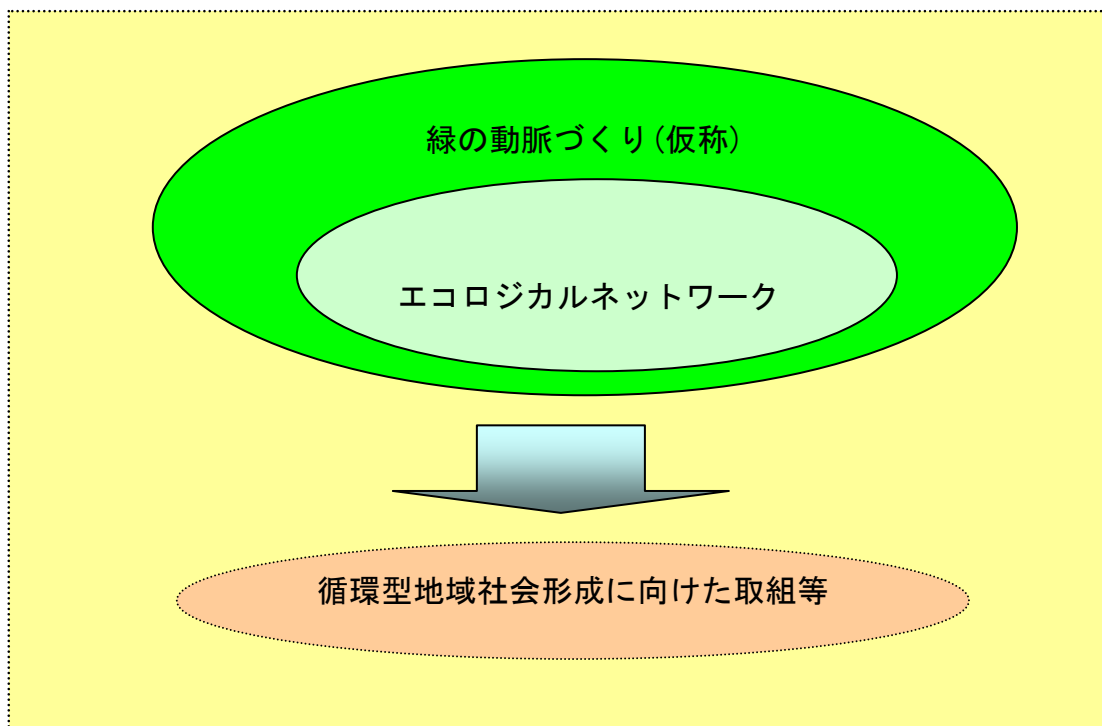
これは、森林、里地・里山、都市内緑地等の保全・整備とともに、自然再生を積極的に進めることで、国土全体の緑量を回復するとともに、その質を高めることを基本的なねらいとしている。

2. 一方、環境については、循環型の社会形成を直接のねらいとした取り組みも展開されている。土地利用と関係が深い分野で言えば、例えば、バイオマスの地域利用などである。

3. これまでは、1の「共生」に重点を置いた施策と、2の「循環」に重点を置いた施策は相互作用を持ちつつも、基本的には別のものであると考えてきたが、両者の関係について再度ご意見を伺いたい。

両者の関係については、次のような整理が考えられるが、どのような整理が適切であろうか。

- (1) 「共生」で考えている「緑の動脈づくり（仮称）」のような緑量回復、質的向上施策には、都市部で排出された CO2 を森林地域で吸収するといった炭素循環や上流森林の保全に伴う良質な有機物の流下が下流の魚場の育成に役立つなどの効果が期待できる。こうした観点に立てば、「緑の動脈づくり（仮称）」は、緑量回復、質的向上施策にとどまらず、循環型の社会形成にも寄与するものである。
- (2) 緑量回復、質的向上施策に、循環型の社会形成に寄与する具体的な施策を追加することで、「緑の動脈づくり（仮称）」という考え方をさらに発展させる。例えば、「緑の動脈づくり（仮称）」の重要な構成要素である流域圏を物質循環単位と位置づけることは適切なのか。

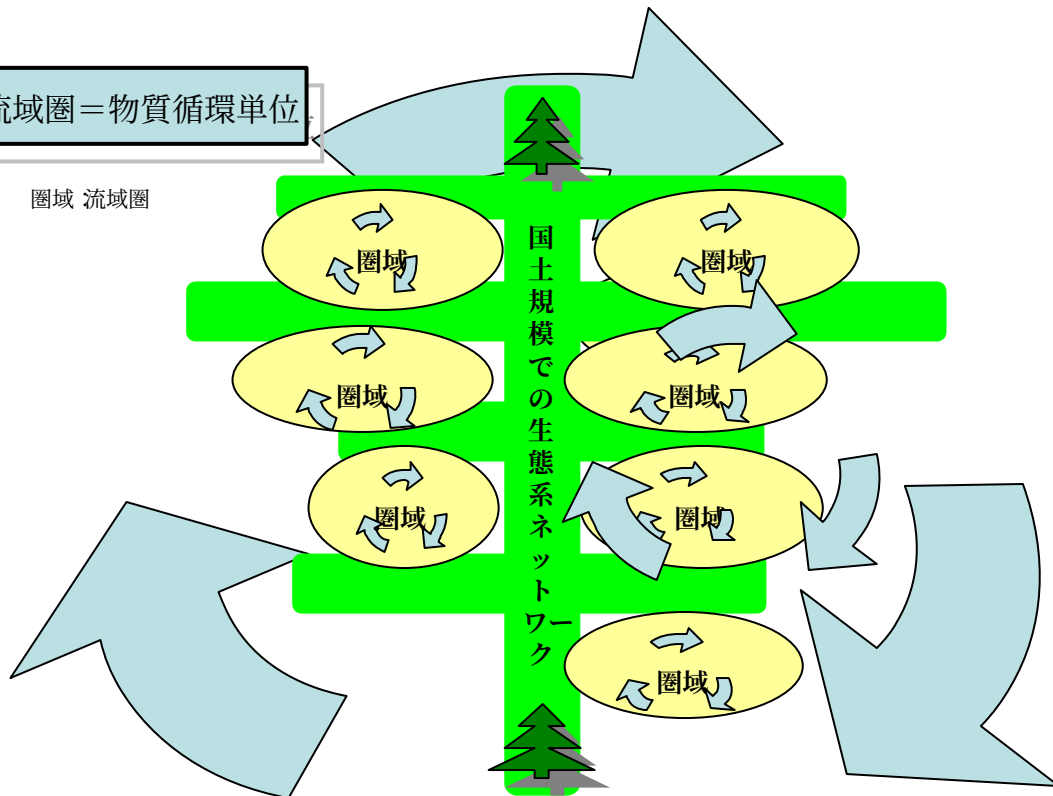


(注)・エコロジカルネットワーク：国土の自然環境の保全、回復を図る際の一方策。

野生生物との共存に向けて均衡のとれた安定した生態系を成立させるという観点から、地球規模、全国規模、地域規模等様々なレベルの生態系のまとまり等を考慮した上で、野生生物の生息・生育に適した空間の連続性、一体性を確保すること。(1998.3、全国総合開発計画)

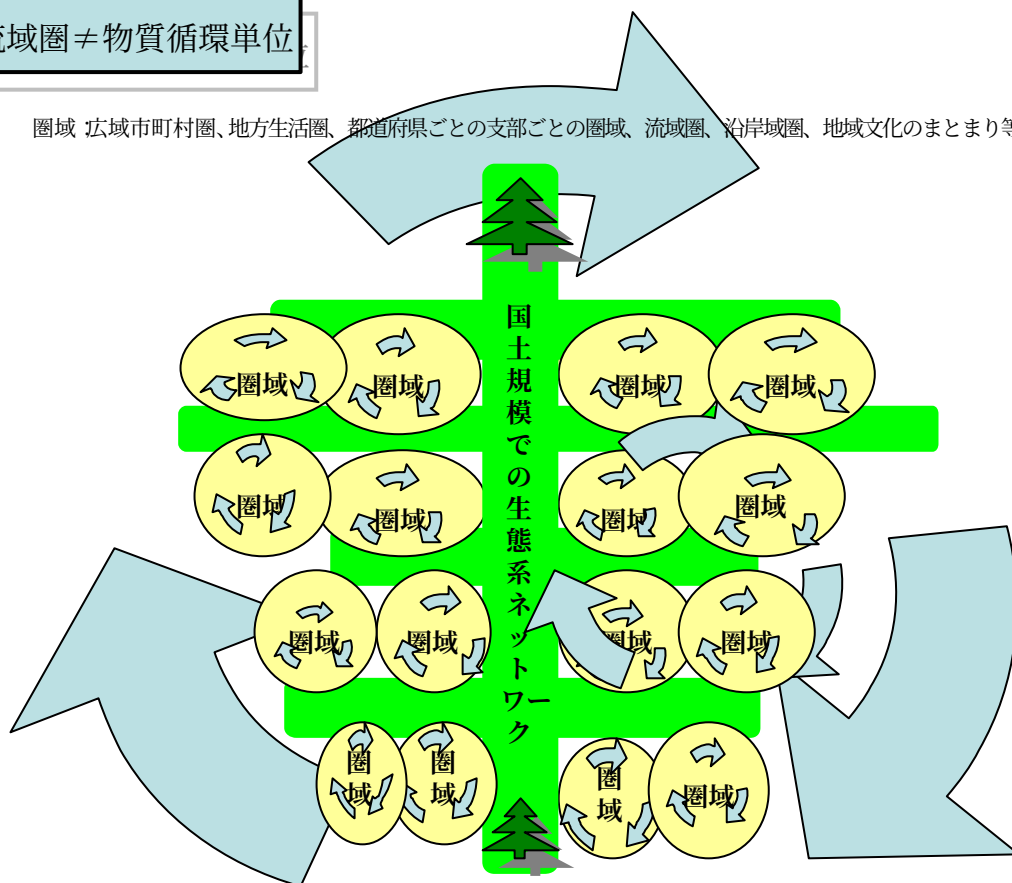
流域圏＝物質循環単位

圏域 流域圏



流域圏≠物質循環単位

圏域 広域市町村圏、地方生活圏、都道府県ごとの支部ごとの圏域、流域圏、沿岸圏、地域文化のまとまり等



物質循環